

コタキナバル日本人学校における生活科の実践

前コタキナバル日本人学校 教諭

岩手県一関市立一関小学校 教諭 伊藤 久美

キーワード：在外教育施設、コタキナバル、生活科、体験活動

1. はじめに

コタキナバル日本人学校に赴任しての3年。日本とは違う習慣、環境、常夏での日常生活。しかし、慣れるまでにそんなに時間は必要がなかった。それは、文科派遣されている他県の先生方、現地スタッフ、そして、保護者、日本人会、そこで知り合った日本人、マレーシア人、様々な方との出会いが私を強くし、寂しさ、大変さを打ち消すほどの多くの感動を与えてくれたからだ。在外教育施設に勤務させていただいたことにより体験できる様々なことを通して、たくさんのことを学ぶことができた。低学年担任として、指導した生活科の実践を紹介する。

(1) 動物たちが棲む熱帯雨林の島

ボルネオ島北部、サバ州とサラワク州からなる東マレーシアに位置し、熱帯雨林が広がる自然豊かな場所である。1年中高温多湿の熱帯性気候に属する。赤道近くに位置し、昼夜の気温差も少ない。平均気温が26～27度。ウツボカズラや、コーカサスオオカブト、ラフレシアなどの植物、オランウータン、テングザルなどの動物が生息している。

(2) 国語はマレーシア語

多民族国家であるマレーシアは、それぞれの民族を尊重しつつ安定した社会を保ち続けている。

民族ごとにマレーシア語、中国語、タミール語、少数民族の言葉（カダザン、バジャウ、ルングス、ムルなど）が使われている。国語及び共通言語はマレーシア語であるが、1957年までイギリスの支配下にあったため、ほとんどのところで英語も日常的に使われている。

そのため、マレー系の学校、中華系の学校、インド系の学校、インターナショナルスクールなどがあり、それぞれの言語で学習している。

(3) 国教はイスラム教

国教はイスラム教であるが、宗教の自由を認めているため、ヒンドゥー教や仏教、キリスト教など信仰する国民も多い。モスクに行く際には肌が出ない服装が義務付けられている。1か月断食月がある。豚肉の入っているものは食べないし、飲酒もしない。

それぞれにお祝いがあり、宗教に関係なく祝日になる。イスラム教の断食（ラマダン）明けのハリラヤ、キリスト教のクリスマス、仏教のチャイニーズニューイヤーなどである。

2. 実践例

テーマ「見たい！聞きたい！伝えたい！～生活科の学習を通して～」

(1) 生きものなかよし大作せん！

<ねらい>

生き物を採取したり、飼育や観察したりすることに関心を持ち、それらの生息する場所、種類による飼育方

法の仕方の違い、変化や成長の様子、自分たちと同じように生命を持っていることなどに気付くとともに、生き物への親近感をもち、大切に飼育を続けたり、自分たちが育てた生き物の事を他者に伝えたりすることができる。

<実践内容>

日本ではそれぞれ季節を感じさせる単元がある。桜の1年間の様子や四季おりおりに活動する虫などについて気候の変化とともに気付かせる学習である。

しかし、コタキナバルは年間を通して26～27度の気温であり、常在する生き物もほとんど変化がないことから、教科書の写真を中心に、インターネットや図鑑を使っでの指導となってしまった。それだけでは、せっかくコタキナバルにいる意味もないので、現地のもも学習させた。幸い、校庭には「ランブータン」「バナナ」「マンゴー」の木が生えているので、その様子を観察させた。また、学校の近くに小川があり、そこで、なにが捕まえられるのか、どうやったら捕まえられるかを考えさせながら、えさを用意し、仕掛けを作り設置した。待つこと2時間。すると、グッピーがたくさん釣れた。「小川にグッピーって」と驚かされたが、子供たちは大喜びで「飼いたい」と大合唱。そこで、学級で飼育している生き物を発表する活動「生き物ランド」につなげ、「グッピー」「とかげ(校庭にいた)」「蝶」「モーレンオオカブト(子供が森で捕まえてきた)」を展示し他学年に見てもらい、大盛況となった。日本とは、教科書とはかなり違う種類の展示になったが、そんなことはお構いなしでポスターを書いたり、案内したりする姿にたくましさを感じた。

乾季になると、植物の葉が茶色になるので、「秋みつけ」の単元の代わりに公園に行って、落ち葉遊びのようなこともすることができた。しかし、気温的には暑く、秋には涼しくなるということを体感させることはできないので、特に、日本に行く経験の少ない児童には指導が必要だった。

蛇足ではあるが、2年生と校庭で生き物探しをしたときに、「コブラ」が現れたので、毒をもつ生き物に対して嚴重に注意をしていかなければと痛感した。

(2) われらコタキナバルたんけんたい!

<ねらい>

地域で生活したり働いたりしている人々や様々な場所に関心をもち、地域の良さに気付くとともに、自分なりに考えたり、振り返ったりして、それを工夫して他者に伝えたりすることができる。

<実践内容>

「町たんけん」では「フィッシュマーケット」「セントラルマーケット」「ハンディクラフトマーケット」を見学した。公共の交通機関や標識などについてや、質問の仕方などについて学んでから出かけた。

公共交通機関であるバスを利用したが、日本とは違い、バス停も時刻表もない。料金は1リンギット(約30円)である。まず、学校からメインロードに出て、ただひたすら待つ。するとバスが止まる。教科書とは全く違うし、普段自家用車を使っている児童がほとんどなので、興味を持って乗り込む。もちろん、エアコンはない、ドアも開けっ放し、大音量の音楽が(運転手の好みだと思われる)が流れる中、にぎやかに話をしながらマーケットへ。

マレーシア人は、人懐こいというか、話をどんどんしてくる人が多く、明るい国民性だと思う。マーケットにつくと、質問より先に子供たちが働いている人に囲まれる。そして、「なに人だ」「どこから来た」「その学校はどこにある」と矢継ぎ早に質問される。マレーシア語、英語ができる児童も多いので、担任ではなく子供たちが答えることが多い。そして、いよいよ本題の質問タイム。カードに書いた質問をしていくと、はじめは一人だった売り場のマレー



シア人だったが、どんどん近くにいる人が集まってきて、日本人学校の子供たちはすっかりマレーシア人に囲まれてしまった。そんな様子だったが、野菜や、魚など、日本と違うものをたくさん見学することができた。

標識や交通ルールでは、マレーシア人は道路を勝手に横切るのが主流であり、車が優先なところがある。信号機を見てわたる指導をしてきたが、ローカルスタッフをはじめ現地の人たちが子供が通ることに気付いて車を勝手に止めて渡してくれるなどしてくれた。教科書通りとはいかなかったが、マレーシア人の親切な気持ちや態度を体感できた。

(3) コタキナバルの文化（むかしあそび）にふれよう！～マリマリ文化村の見学学習～

<ねらい>

昔の遊びを知り、楽しみながら、友達や地域の人との関わりを広げ、自分ができることや友達のよさに気付くとともに、遊び方をたずねたり、教え合ったりしながら、楽しみ、学習したことを他者に伝えたりすることができる。

<実践内容>

マレーシア、特にボルネオ島の文化、生活、そこで行われていた昔の遊びなどを知るために「マリマリカルチャービレッジ」に見学に行った。

幸運なことに、ローカルスタッフが、いろいろな民族出身だったので、この文化村で紹介されているブースごとに〇〇先生の民族だと説明を加えることで、子供たちはさらに興味をもつことができた。

カダザン・ドゥスン……農耕民族、サバ州の人口の約3割の最大の民族。広く分布。

ムル……狩猟民族、首狩り民族、「丘の人」の意味がある。低地から内陸部に住む。

バジャウ……漁業と畜産と別れる民族、サバ州人口の1割で海岸沿いに住む。

マレーシア人のスタッフにマレーシア人というとき必ず「私はマレーシア人ではなく、カダザンだ」とか、「私はムルだ」などと言われる。私からみるとマレーシア人なのだが、そこは譲れないものがあるらしく、言葉も少しちがっているということだった。それぞれの民族の食生活、住居、遊びなど体験しながら活動することで、マレーシア、特にサバ州の民族について体験を通して理解を深めることができた。

特に、ムル族のブースでは、どうやったら飛ばせるかなど友達同士で話しながら吹き矢を体験することができた。また、竹でできたトランポリンが家の中にあり、民族の歌に合わせてリズムをとり全員でジャンプすることも楽しみながら体験することができた。最後に、バンブーダンスを希望者で行うものがあったが、全員が手を挙げ、ステージに上がり、説明を受けながら民族楽器で演奏される現地の曲に合わせてダンスをすることができた。



これらのことについてキナバルタイム発表会（総合的な学習の時間の発表会）で「見たい！聞きたい！伝えたい！」というテーマで全校や保護者に向けて発表した。

3. おわりに

コタキナバル日本人学校に赴任させていただき、低学年を中心に指導を重ねてきた。その中で、体験学習は、子供以上に自分にとっても驚きや発見が多いものだった。この国で育ってきた子供たちも多く、たくさんの言葉を操りながら、積極的にコミュニケーションを取ろうとする態度に、国際人としての一面を見ることができた。また、コーディネートを手伝ってくれた現地スタッフや、指導を助けてくださった校長先生、そして、何より見ず知らずの日本人の集団に対して、親切丁寧に対応してくれたマレーシア人の方々に感謝を申し上げたい。さらに、ここを見学するといよいよなどアドバイスをくださった保護者の方々、日本人会の方々、

現地に住まわれている日本人の方々にもたくさん助けをいただいた。

コタキナバルに赴任中は、外国にも関わらず子供たちとの学習も、活動もスムーズに行うことができていた。それは、ひとえに周りの方々のおかげの支援であったと感じている。

帰国した今、この経験を生かし、今度は私が、子供たちや同僚の教職員の皆さんの支えになれるような生き方をしていかなければと思っている。